

# ヘーゲルのフランクフルト期における 反省概念について

澤 味 進

本論考は、ヘーゲル哲学における反省概念(1)の原理的および発展史的  
理解に向けて、いわゆるフランクフルト期において、どのような  
意味内容でヘーゲルが反省という概念を捉えているか、という問題  
をめぐっての考察である。

一般的にヘーゲルは、フランクフルト期に続くイェーナ時代以降、  
つまり哲学者として自認し、他からも認められるようになって以来、  
哲学の問題を主要な思索対象としていくにあたり、「反省」*Reflexion*  
と「思弁」*Spekulation* という対概念を哲学思维の最も基本的な機  
能、原理として用いている。(2)この反省―思弁関係は、「悟性」―  
「理性」の対概念に置換されうる。両関係とも後者が前者に対して  
より高次の原理、能力であり、反省、悟性はそれぞれ思弁、理性に  
対して共に否定的、消極的な意味を持つ。それは、反省が規定、限  
定する作用であり、その点で反省は本来有限な思惟機能であり、反  
省の所産が対立、分裂であるのに対して、思弁は絶対的同一として  
の真の無限を捉える働きであることによる。さらに、有限な思惟能  
力だけではなくて、人間存在、あるいは社会的状況の分裂状態も

「反省的」と見なされる。そしてヘーゲルにとって、そうした分裂  
状態を解消し、統一へともたらしすが、彼の青年期からの思索の  
根本的動因であるから、分裂をきたす反省は、論理的にも実在的  
にも思弁にとって克服されるべきものであり、その意味で反省は非本  
来的な哲学態度とされるわけである。それは、彼の最初の哲学的著  
作である『フィヒテとシュリングの哲学体系の差異』や「信と知」  
論文において、反省が「絶対的な分離」(Diff., 66)として、ある  
いは「有限者の能力として」(Diff., 10)規定され、「部分を自体と  
し、そうすることによって全体に到達することを不可能にする」  
(Gl. u. W., 383)ものであると述べられていることから、端的に  
理解されうる。

この反省概念の規定が成立してきた源泉に考察の眼を向け、何故  
反省が「分離」と呼ばれねばならないのか、あるいは、それはいか  
なる位置を占めうるのか、という問いを立て、フランクフルトでヘ  
ーゲルが理解している反省概念の諸相を明らかにしようとするのが  
ここでの意図である。その際、フランクフルト期のヘーゲルに、実

際に行なわれた思想交流によってかなりの影響を与えたと指摘されているヘルダーリンやジンクレールの思想が考慮されるべきである。<sup>(3)</sup>それは、後に示されるように、ヘーゲルの規定する反省概念との共通性が彼らに認められ、かつ时期的には彼らの反省理解がヘーゲルのそれに先行しているからである。すなわち、ヘルダーリンおよびジンクレールの思想内容が、それまでのカント的二元論を脱却し全体を有機的に結びつけようとするヘーゲルの統一志向に対して、その一契機となっている、と推定されるからである。

そこで叙述は、ヘルダーリンとジンクレールの考えをまず確認し、それに続いてヘーゲル自身の反省概念を跡づけて行く。

## 一

一七九七年にヘーゲルは、ベルンのシュタイガー家を去り、フランクフルトのゲーゲル家に家庭教師として赴任した。そこで再会したヘルダーリンがいかなる思想を抱いていたかは、後に「判断と存在」<sup>(4)</sup>と題され、一七九五年の四月に書かれたと推定される断片において窺い知ることができる。その断片における中心的内容は、「判断」(Urteil)と「存在」(Sein)とをそれぞれ「分離」(Trennung)と「結合」(Verbindung)とするものである。判断とは「根源的な分離」であり、その分離によって「客観と主観が初めて可能になる」(StA. IV, 216)。その客観と主観とは判断によって分離される以前には「知的直観のうちで極めて密接に統合されている」ものであるから、判断は「源一分割」(Ur-Teilung)と言われる(ebd.)。これに対して存在は「主観と客観の結合を表現し」、その存在にお

いては「主観と客観とが端的に、つまり単に部分的に合一されているのではなく、したがっていかなる分割も行われ得ることのないように合一されている」(ebd.)。この「主観と客観の根源的統一」<sup>(5)</sup>としての存在は、フィヒテ的な「我は我である」という自己意識に基づく「同一性」(Identität, StA. IV, 217)とは異なるものであり、むしろ「我は我である」は根源的分離の「最も適切な例」(StA. IV, 216)であるとされる。というのはヘルダーリンによれば、意識の同一性においては主観としての自我と客観としての自我とが端的に合一されているのではなく、「逆に自我は自我からの自我のこうした分離」——つまり主観としての自我と客観としての自我の分離——によってのみ、「可能となる」からである(StA. IV, 217)。ヘルダーリンの言う存在は、意識の同一性ではなく、「知的直観としてしか考えられ得ない」<sup>(6)</sup>のである。

さらに、こうしたヘルダーリンの思想を共有しつつ、フランクフルトでヘーゲルと交流したのがジンクレールである。彼の残した「哲学的推論」によると、ヘルダーリンが分離として把握する判断が「反省」に相応する。すなわちジンクレールにおいては、「知が反省の所産である限り、知は常に源分割【判断作用】(Urtheilung)を前提する」<sup>(6)</sup>のであり、「反省する自我は何をなすか」というそれは分離し、当為としての合一を指定する」のである。このジンクレールの反省理解は、当面の問題であるヘーゲルの反省理解との関係において、文書として残された形での、分離、指定としての反省の術語化、という意味で注視されるべきであろう。それは、反省を、ヘルダーリンの捉える存在—判断連関の判断の項に、すなわ

ち統一と分離との原理的關係の分離の側に、置くということが、基本的にはヘーゲルの把握する反省概念に通じるからである。

ところで、ヘルダーリンの「判断」を受けてジンクレールが反省を分離として捉えるのは、思惟に対する自然の優位性をとるルソンの反省観によるばかりではなく、むしろ本質的には、反省を哲学営為の基本的方法として掲げるフィヒテに対して、——ヘルダーリンがそうであったように——一定の批判的な立場をとることによる。そこで若干迂遠ながらもフィヒテの「反省」を一瞥することによって、反省と分離との内的な関連を探ってみたい。

フィヒテの方法的原理である反省の意味内容は、一七九四年に出版された『知識学』の概念、またはいわゆる哲学の概念について<sup>(11)</sup>において明らかにされている。そこでは反省は「抽象〔捨象〕」(Abstraktion)と相即のものであり、その關係は論理学と知識学との相關關係に対応する。つまり、「論理学は内容から分離された形式のみを打ち立てる」(FW. I, 67)学であり、「内容から形式のみを自由に分離することが、抽象と呼ばれる」(ebd.)。これに対して、「いかなる命題も内容および形式なしでは可能ではならず」(FW. I, 49)ので、形式のみの論理学は内容を持たねばならず、その内容となるのが「知識学」である。そして、内容から分離され、つまり抽象された形式が再び内容となる活動が反省である。「この自由の第二の活動〔第一の活動は抽象——引用者による〕、それによって形式は形式自身の内容になり、自分自身へ帰る (zurückkehren in sich selbst)」ことになる、そうした活動が反省と呼ばれる」(FW. I, 67)かくして論理学が可能となり、論理学は知識学によって基礎づけら

れるとされる (Vgl. FW. I, 68)。このような内容化としての反省は、具体的には意識にのぼらせるといふことであり、つまり表象するといふことである。「反省は、知識学が学である限り、知識学全体を支配するものであり、その反省は表象するといふことである」(FW. I, 80)この意識化、表象活動としての反省により、抽象的論理形式が基礎づけられる。それは例えば、一般論理学の同一律である「A=A」が、後に『全知識学の基礎』においても定式化されるように (Vgl. FW. I, 98)「我は我である」(Ich bin Ich) (FW. I, 69)と反省されるがごときである。

ところが、フィヒテのこの「我は我である」という同一性は、それが表象作用としての反省による限り、既に見たヘルダーリンの見解のように、根源的な統一ではない。なぜなら、表象する当の自我が自分自身を表象されるものとして自分の前に置き、つまり対象化して、その後自身と同一化させるという過程を踏むからである。表象作用のもとでは、主観—客観分化が既に前提されてしまい、いかなる同一性に対しても分離が先行していることになる。この点でヘルダーリンは「我は我である」を「源—分割」とみなし、ジンクレールは反省を分離とし、反省によって「当為としての合一」が「要求される」にとどまるとするのである。そしてジンクレールが反省の相対性から脱け出た体系構成の方法を探究しようとし、またヘルダーリンも「あらゆる分裂したものの大なる統合」<sup>(15)</sup>を追求していくように、フィヒテ的な反省では彼等の志向する根源的統一<sup>(16)</sup>は達成されないのであり、それゆえに彼等はフィヒテ的反省に対して一定の距離をとるのである。

以上で見たヘーゲルとジンクレールとの考え、つまり根源

的統一と分離との関係に関する哲学的思想内容は、フィヒテの反省がはらむ問題と関わりながら、フランクフルトにおいてヘーゲルも加わった思想的サークルの中で議論された。この時期に残されたヘーゲルの論稿群によると、明らかにヘーゲルは根源的統一原理を模索し、分離、対立を克服しようと試みている。その行程の中でヘーゲルが表示する統一的原理が「存在」、「愛」、「生」であり、克服されるべき分離が「反省」である。すなわち、「存在は主観と客観との綜合であり」(ThJ; 268)、「対立するものの一致は生であり、異なったものの関係として愛であり、存在である」(ebd.)とされ、これに対して反省に関しては「生を分離するものである」(ThJ; 270)と述べられている。生を分離する反省は、生が統合の原理であり対立を廃棄するものであるから、生にとっては否定されるべきものである。ここに、分離としての反省という点で、ヘーゲル、ヘーダーリン、ジンクレールの間の共通性を見出すことができる。そしてこのような反省の把握を通じてヘーゲルは、フランクフルト期以前において思想的に依拠していたカント哲学を、その二性性のゆえに反省的と捉え直すことにもなる。かくしてヘーゲルの反省理解の源泉にヘーダーリンらの考えがあるということが、今までの外形的な追跡から推定できよう。むしろヘーゲルの反省理解は、彼等との共通理解に尽きるわけではなく、ヘーゲルに固有の仕方で開催されてもいる。続いてそうしたヘーゲル自身の反省理解を追ってみる。

## 二

まず第一に確認しておかねばならないことは、ヘーゲルの把握する反省は、次のような歴史把握の中で、自らの位置を占めている、ということである。それは、「未展開の合一から出発して、教養形成を通じて、完成された合一への円環」(ThJ; 379)としての把握である。こうした合一と再合一とのいわば中間段階に反省が位置する。

「未展開の合一には、分離の可能性〔つまり「反省の可能性」(ebd. Ann. [b])である——引用者による〕と世界とが対立していた。展開の過程で反省は次第に多くの対立を産出し、その対立は衝動の満足のなかで合一されるのだが、最終的に反省は人間の全体そのものを人間に対立させた。そして今や愛が反省を完全な無客観性において廃棄し、対立したのから疎遠なものという性格をすべて奪いとり、生はもはや欠けるところなく自分自身を見い出す。」(ebd.)

このように、ヘーゲルの捉える反省は、統一に対する分離の側に立つにしても、それは静止的ではなく動的に、しかも逆説的ながら或る存在理由が与えられた形で、その位置が与えられている。この意味での反省が、フランクフルト期最大の論稿である「キリスト教の精神とその運命」における「運命」に相当する<sup>18)</sup>。というのも運命とは生の分化であり、それは愛によって再合一される、つまり「和解される」(ThJ; 283)という構造を持つからである。

こうした反省の合一に対する位置は、分離としての反省が統合を

前提する、ということによって一層明らかに確定される。分離し、対立を産み出す反省は、決して自身を単独で存立させることができず、自らの根拠として統合を必要とするのである。「対立した諸制限そのものは存立し得ない。その対立した諸制限は自身を廃棄しなければならぬ、それゆえ制限は存在し得るためにはひとつの統合を前提する。」(ThJ, 382<sup>(19)</sup>) 何故対立したものがそれだけでは存立しえないのか、というところは次のようなヘーゲルの洞察による。つまり、反省によって産み出されるところの「対立し合っているものは、相互に条件づけ、条件づけられている。…規定するものは規定されるものなしには存在し得ず、逆も同様である。どちらも無条件に存在するものではない。いずれも自身の實在の根を自己の内になぞらえていない。各々は単に相対的にのみ必然的である。一方は他方にとって、したがって己れにとっても、疎遠な力によってのみ存在するにすぎない」(ThJ, 378) という洞察である。この理解に従えば、対立している二項のうちの一項を固定しようとする場合、それには存立の根拠がないのであるから、その一面的な固定は自身自身の存立を否定することになる。「反省の自己自身を否定する一面性」(ThJ, 379, Anm. [b]) と言われる由縁である。それゆえ反省の所産が存在しうるためには、分離に、つまり或るものとそれではない或るものとの他者との対立関係に、——したがって制限された有限者に——よらない統合が前提されねばならないのである。

この統合は、今見た存在根拠としてのみならず、認識根拠としても前提される。「抗争するものが抗争するものとして認識されるのは、既に統合されていることによる。統合はそこで比較が生じ、そ

こで対立項がそのものとして不十分なものとして現われるところの基準である。」(ThJ, 382) つまり、反省の所産である対立項がそれとして認識されるのは、相互に対立する両項が関係づけられて初めて可能なわけであり、その関係化の根拠が統合なのである。<sup>(20)</sup>

かくして反省は、存在根拠および認識根拠としての統合を前提する<sup>(21)</sup>。だからこそ「未展開の合一」が反省に先立ち、また「完成された合一」において反省は再統合されねばならないのである。反省による対立項の相互依存性、換言すれば各項の単独での存立の不可能性と、統合の前提性とは、このようにしてヘーゲルに固有の歴史的把握の内での必然的な連関を形づくるのである。

なお附言しなければならないことは、ここでのヘーゲルにとって、反省は哲学であり、統合は宗教という形態をとる、ということである。すでに察知されるように、ヘーゲルの捉える真理性は統合の内であり、反省は非真理である。真理としての統合、つまり「生」、「存在」は「反省の外にある」(ThJ, 380) もなのである。<sup>(22)</sup> そして「哲学は思惟であり、したがって一方では非思惟という対立を有し、また他方では思惟するものと思惟されたものとの対立を有する」(ebd.) がゆえに、哲学は反省であり、その哲学の内には真理性が認められない。つまり、「思惟されたものは、分けられたものであり、思惟することに対立している」のだから、「思惟可能性からは存在は帰結しない」のである (ThJ, 383)。ここから、反省である哲学は、有限者のみに関わり、「哲学は真の無限者を自己の領域外に指定しなければならぬ」(ThJ, 348) とされる。これに対して「真の無限者」への接近は「信仰」によってのみ可能であり、<sup>(23)</sup>

その場合、真の無限者は「神的なもの」あるいは「神」であり、<sup>(24)</sup>その成立する場が「愛による宗教」である。確かに、相互依存性にとらわれる反省的思惟も、マンチノシーという形で統合への接近を図りうるが (Vgl. ThJ., 384, 349)。<sup>(25)</sup> マンチノシーを統合されたものとして認識することは、反省の立場からは矛盾でしかない。つまり、真理であるところの「神的なもの」に関して反省の形式で表現されたものは、そのまま直接不合理であり、……神的なものは悟性にとって矛盾 (ThJ., 306) なのである。逆で、かたして真理としての統合が理解されるのかというと、「神の観念は……生きた連関としてしか捉えられない結合であり、そこでは関係づけられたもの<sup>(26)</sup>の関わりについて、単に神秘的にしか語られ得な<sup>(27)</sup>」 (ThJ., 308) のである。死物の国「宗教の死」である「悟性の働<sup>(28)</sup>」 (Vgl. ThJ., 334) と同じの反省の立場——引用者ごとき<sup>(29)</sup>で矛盾であるものは、生の国ではそうではな<sup>(30)</sup>」 (ThJ., 308 f.) のである。こうした哲学と宗教との関係には、統合の絶対性を保証するための一種の隔絶性が認められる。それは、やはりまた反省の消極性、否定性を示すものなのである。

以上、ヘルダーリンらの思想的影響を受けつつ、マランタンルトでヘーゲルが把握している反省概念は、統合に対してあくまで積極的な意味を所有していない。<sup>(31)</sup> こうしたヘーゲルの基本的見解は、発展史的な視点から言えば、哲学を彼の同時代の哲学と限定し、つまりカント、フィヒテ、ヤコービらの哲学を反省哲学と規定すること<sup>(32)</sup>で、イエーナ期初頭に展開されている反省概念に保たれているの

であろう。さらた真理としての宗教を、ヘーゲルにとっての真の思惟の顯現である哲学として展開することが、イエーナ期におけるヘーゲルの体系構成に至るの<sup>(33)</sup>である。

#### 〈引用文献略号〉

Diff. Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie.

Gl. u. W. Glauben und Wissen oder Reflexionsphilosophie der Subjektivität.

——『<sup>(34)</sup> Georg Wilhelm Friedrich Hegel, Gesammelte Werke, hrgs. v. der Rheinisch-Westfälischen Akademie d. W., Hamburg Bd. 4 1968.』<sup>(35)</sup>

ThJ. *Hegels theologische Jugendschriften*, hrgs. v. H. Nohl. Tübingen 1907.

Ros. K. Rosenkranz, G. W. F. Hegels *Leben*, Berlin 1844. Mit einer Nachbemerkung zum Nachdruck, Darmstadt 1977.

FW. J. G. Fichte, *Fichtes Werke*, hrgs. v. I. H. Fichte, Berlin 1971.

StA. F. Hölderlin, *Sämtliche Werke*, Stuttgarter Hölderlin-Ausgabe. Im Auftrag des Kultusministeriums Baden-Württemberg, hrgs. v. F. Beissner, Stuttgart 1943ff.

#### 注

(一) 「反省」Reflexion という言葉の原義を、哲学思想上の

意味の変遷等に関して、単に概略ながらも一定の確認を行なうならば、それは次のようなものである。

この言葉 Reflexion は十六世紀のなかばにフランスからドイツに移入され、ちょうどその元の言葉はラテン語の reflexio に求められ (Vgl. *Deutsches Fremdwörterbuch*, begonnen v. H. Schulz, fortgeführt v. O. Basler, Berlin 1977, Bd. 3, S. 213 ff.)。この reflexio は動詞 reflecto から名詞化したものであり、reflecto は re + flecto との合成語であり、「後へ曲がる、反対の方へ向きを変えよ」といった意味を形成する。この reflecto, reflexio がフランスを経由して (reflexion)、『主に物理学的な用語としての「反射する (Rückstrahlung)」の意味でドイツにおいて用いられた。それは一般に音や光といった波が、それを通さないものの表面によってはね返されること、光の反射、音の跳反といった事態をさす。こうした「はね返りものと方へ戻ってくる」という基本的な意味が、意識の領域において適用され、「熟考 (Nachdenken)」「つまり吟味し深く考えること」を意味するようになる。それは、認識論や心理学などの分野において、外的事象へと向けられていた注意が翻って、獲得した知識などに向けられ、それらを吟味する態度を指示する。

こうした知的な活動それ自身は、古代ギリシアにおける哲学成立時からすでに機能している (Vgl. *Handbuch philosophischer Grundbegriffe*, hrsg. v. H. Krings, München 1973, S. 1203 ff. u. *Wörterbuch der philosophischen Begriffe*, hrsg. v. R. Eisler, Berlin 1929, S. 657 ff.)。例えど、ノットマン

スの「共通感覚」を内的な識別機能として、後に反省と呼ばれる働きと見なすことができよう。この共通感覚を受け継いでトマス・アクィナスは、認識活動そのものと、知覚等から得られた形象との二種をその対象とする反省を論じている (Thomas Aquinas, *Summa theologiae*, I a, 85, 2)。<sup>20)</sup> むしろ、イギリス経験論においてロック、ヒュームなどは意識の内て生起するものが一般に関わることを反省と呼ぶ。ロックでは反省は感覚と並んで認識の源泉のひとつであり、内的知覚、内的精神活動を意味する (J. Locke, *An Essay Concerning Human Understanding*, Book II, Ch. 1)。<sup>21)</sup> ノットマンの「感覚の印象」と「反省の印象」とを区別し、反省は観念と同義と考えられている (D. Hume, *A Treatise of Human Nature*, Book I, Sect. II)。<sup>22)</sup> またライプニッツにおいては意識内部の諸表象に関わる反省と、自我意識に関する反省とが考えられている (G. W. Leibnitz, *La Monadologie*, par Émile Boutroux, 1881, pp. 159)。<sup>23)</sup> このような伝統的用法を受けつつカントは反省を、既与の諸表象と我々の「感性」と「悟性」という相互に異なる認識源泉との「関係の意識」であると<sup>24)</sup>、周知のように四つの「反省概念」を提示する (I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B. 316 ff.)。<sup>25)</sup> そして、ヘーゲルの反省理解に関連するノットマンの「反省」が続くのである。

(20) Vgl. H. Kimmerle, *Das Problem der Abgeschlossenheit des Denkens*, *Hegel-Studien Beiheft* 8, Bonn 1970, S. 49.

(21) Vgl. D. Henrich, Hölderlin über Urteil und Sein. Eine

Stude zur Entstehungsgeschichte des Idealismus, *Hölderlin-Jahrbuch* 14, 1965/66, S. 73-96, ditto, *Hegel im Kontext*, Frankfurt a. M. 1971. u. H. Hegel, *Isaak von Sinclair zweischen Fichte, Hölderlin und Hegel. Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte der idealistischen Philosophie*, Frankfurt a. M. 1971. (1) の著作は、シムクレーンの草稿『哲学の推論』Philosophische Reasonnements が、巻末に収められている。(2) ditto, Reflexion und Einheit. Sinclair und der „Bund der Geister“ - Frankfurt 1795-1800. *Hegel-Studien Beiheft* 9. Bonn 1973. S. 91-106.

(4) F. Hölderlin, *Urteil und Sein*, StA, Bd. 4, hrsg. v. F. Beissner, 1961, S. 216/7.

(5) Vgl. D. Henrich, Hölderlin über Urteil und Sein, S. 77, 83 f.

(6) D. Henrich, a. a. O., S. 79.

(7) Ebd.

(8) 注 (3) 参照。

(9) H. Hegel, *Isaak von Sinclair*..., S. 246.

(10) H. Hegel, a. a. O., S. 245.

(11) シムクレーンがヘルダーリンと会したのはイエーナにおいてであるが、彼は頭初哲学よりも政治学を学ぶためにイエーナに来ており、ルソンの思想などを研究した。その関係でルソンの『人間不平等起源論』にある「自然は我々を健全な状態に規定しているのだから、私はあえて次のようにほぼ確信するに

至る。すなわち反省の状態は自然に反している。よくよく考えている人間は墮落した動物である」といった文章に示されるような、思惟の自然に反する状態に対する批判が、シムクレーンの反省概念に影響している。Vgl. H. Hegel, a. a. O., S. 24.

(12) J. G. Fichte, *Über den Begriff der Wissenschaftslehre oder der sogenannten Philosophie*, FW., Bd. I, S. 27-81.

(13) フォヒテは反省の語義を「その原義に従って用いようとせよ」と言っている。注 (1) 参照。

(14) H. Hegel, *Isaak von Sinclair*..., S. 245.

(15) F. Hölderlin, *Fragment von Hyperion*, StA, III, 181.

(16) フォヒテは「フォヒテ哲学それ自身が、このような批判的見解でおおまかめられるわけではなく。それは「知識学」の核心である「事行」に目を向けるだけでも十分であろうし、またフォヒテ自身「同じく同じものがただ反省において区別されるべきなり」という事態を洞察してもしる。(Z. B., FW. I, S. 170.)

(17) Vgl. Ros. 81.

(18) 中経肇「運命と和解」(金子武蔵編『日本倫理学会』『ケーゲル』以文社、一九八〇年、七七頁-九二頁) 参照。および『ケーゲル哲学の基本構造』以文社、一九七九年、二五三頁-二七三頁参照。

(19) こうした理解の根底には、スピノザの「すべての限定は否定である」という命題が存すると言えらる。(Vgl. K. Düsing, *Das Problem der Subjektivität in Hegels Logik. Hegel-Stu-*

*dien Beilage* 15, Bonn 1976, S. 57)

(20) Vgl. H. Hegel, *Isaak von Sinclair* ..., S. 85 f. u. K. Düsing, a. a. O., S. 52.

(21) 統合の前提性に関してはヘルダーリンも同様の理解を持つている。「分割の概念は既に客観と主観との対立的な相互の関係の概念が存しており、それによって客観と主観とが両部分であるところのひとつの全体という必然的前提が存している。」(StA. IV, 216)

(22) Vgl. ThJ., 310.

(23) Vgl. ThJ., 383.

(24) Vgl. ThJ., 303 f.

(25) こうした点でデュルタイの規定する「神秘的汎神論」を認めようがよい。Vgl. W. Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels, Gesammelte Schriften*, Bd. 4, 138.

(26) この意味で一般的な矛盾律の適用は、ヘーゲルにおいて制限される。Vgl. K. Düsing, a. a. O., S. 56.

(27) こうしたヘーゲルの反省把握を源泉とする彼の哲学形成は、ハイデガーなどが近世哲学を表象活動に基づく反省と総括してとらえよう (Vgl. M. Heidegger, *Nietzsche*, Bd. 2, 1961, S. 461) 思惟のあり方そのものを克服しようとする試みであると  
言える。

(岩波・すすむ 筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)